令和六年度 作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部
学位記授与式　　式　辞

本日ここに、「作新民」という建学の精神のもと、卒業生・修了生の皆さんが学位記を手にされ、本学から新たな世界に巣立っていかれることに対し、本学教職員と在校生を代表して心からお祝い申し上げます。栃木県知事福田富一様をはじめご来賓各位には、ご多忙の中を本学の学位記授与式にご臨席を賜り、心からお礼申し上げます。

さて、いま世界を見渡しますと、あの約四年にわたるコロナ禍からは現在でも感染予防対策は行われつつも、ほぼ開放され、人類の 1/4 以上の人々を苦しめている慢性的貧困をはじめ、飢餓、戦争、人権抑圧、環境汚染、生態系の破壊など、人間の尊厳と生存を脅かし、人類の未来を蝕んでいる「地球的問題群」が、互いに連動し合いながら問題をより深刻化させています。

我が国においても、たとえば今年出生数約 72 万人となり、国を支えていく人間それ自体が減少し、さまざまな分野に影響を及ぼしつつありますし、能登半島や今回の大船渡の火災など自然災害も頻発しています。被害にあわれた方々に心よりお見舞い申し上げます。

こうした諸問題の中には、人間自身が引き起こしてきた問題も少なくなく、今後私たち人間が解決していかなければなりません。そのために重要なことは、私たち一人一人が、郷土民、国民、地球民という複合的な観点から、一方では身近なローカルな視点に立ち、他方ではグローバルな視点に立ちながら、さまざまな問題について考え、取り組んでいくことです。今日、多文化共生社会を目指していく 21 世紀において、とりわけ若い人々のイマジネーションとクリエティビティに満ちた智慧とムーブメントを起こしていく進取の気性が何よりも必要であると私は考えています。

卒業・修了される皆さんには、こうした観点から、ぜひ今後考えていっていただきたい点を 2 つ私からのメッセージとして送りたいと思います。

第一は、「とらわれの鎖」を断ち切った「対話」をさまざまな場で今後行なっていってもらいたいということです。「とらわれの鎖」とは、さまざまな偏見や特定の物差しによって人間を区別したり、差別的にみる見方です。

今日、自国優先主義の国レベルのエゴイズムから個人のエゴイズムまで、世界中で利己主義が蔓延してきているように感じます。現在、Diversity や Equality が世界的に提唱される中で、人間観の問題を私たちが真剣に考えていくことが最も重要であるといえます。

男性と女性、またはLGBTQ、あるいは健常者と障がい者、大人と子どもなどのように、一般的に人間をある一定の物差しで区別しています。しかし、人間は人間であり、そうした区別を問わず一人の人間として「よく生きようとしている」存在であることを互いに認め合う社会を構築していかなければならないと考えます。

皆さんは、大学・短大入学後に、学業や部活動を通して、さまざまな友人や教員などとの新たな出会いがあり、交流しながらさまざまな知識や技術などを修得してきたことと思います。そこには、自分とは異なった考え方や価値観などの違いがあり、ぶつかり合い議論したことも数多くあったのではないかと想像します。

しかし、その異なった考え方に触れることにより、自分自身の考えを見つめ直すことができ、それによって自らを成長させることができるのではないかと考えます。

これから社会に出て、さまざまな人間と交流することと思います。ぜひ、「寛容」の心をもって、「とらわれの鎖」を自分で断ち切り、大いに他者との「対話」を行なっていってください。

第二は、自分の弱さをばねにして、努力し生きていってもらいたいということです。人間には誰にも弱い部分があります。このことについて先日、NHKの「プロフェッショナル」という番組で栗山英樹監督のドキュメンタリーが放送されていました。大谷選手を育てた監督、元WBC監督としても知られており、いま日本で最も注目されている監督の一人です。

その番組の中で、栗山さんは、プロに入り、甲子園組などの選手たちとの力の差をひしひしと感じながら、それでも二軍で一生懸命練習をしていたそうです。そのとき、内藤さんという二軍監督が彼の姿を見て、自分に「寄り添い」、練習に「とことん付き合ってくれた」ことが忘れられないと、栗山さんは語っていました。その後、監督になってから、彼の言葉の端はしに「寄り添う」、「とことん信じてみる」、「相手の話を聴く」という言葉が頻繁に使われていました。私は、失礼ですが、決してずば抜けた成績をプロで挙げたわけではない栗山監督が、なぜ多くの選手から慕われるのか、その理由をこれらの言葉から多少垣間見たような気がしました。

私は、自分の弱さを自覚している人は強い人間だと思います。「弱さを知ることは強さの第一歩」です。そして、自分の弱さを認識している人は、相手の弱さにも共感できるのではないかと考えます。そこに一般的な言葉でいえば「やさしさ」が生まれます。
ぜひ、これから自分の弱さをばねに努力していただき、相手に共感できる人間になってください。

むすびに、刻々と変化する時代の中で、自主的・自律的に生きていく人間の育成を意味する「作新民」という建学の精神の下で学んだ皆さんが、自ら信じた道を歩んでいき、諸先輩に続いて今後さまざまな分野で活躍されることを祈念し、私の式辞といたします。

令和 7 年 3 月 16 日
作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部
学 長 渡邊　弘